

新原保存仏像碑と長沼賢海

今年のノーベル医学・生理学賞は、東京工業大学栄誉教授・大隅良典さん(生物学)が受賞し、日本人のノーベル受賞が三年連続となりました。

これまでノーベル賞受賞者に福岡県出身者がいるとかいないとか考えたこともなかったのですが、あらためて地元福岡で注目されたのが、福岡県出身者として最初の受賞者であったこと(九州では、鹿児島県出身の赤崎勇氏に次ぐ二人目の受賞)。福岡県は大隅さんに県民栄誉賞を授与することを決めました。

可和と韓橋主膳・神武左京。当時の考え方(神仏習合)では、神社の神様は同時に仏様でした。宇美八幡宮には誕生寺という寺院があり、今の神主の役割を務めていました。「留守」は宇美八幡宮の責任者としての役職(美可和は「三河守」の意と思われる)、韓橋・神武の二人はその補佐役でしょう。

明治維新によって成立した太政官政府は、神仏習合を否定して、神仏分離(神社と寺院を分ける考え方)へとカジを切りました。神仏分離の布告が出されたのが慶応四年三月です。これが行き過ぎて、神社内の寺院や仏像の破壊に至り、それが廃仏毀釈と呼ばれることになりました。県内でも太宰府天満宮などが激しい廃仏毀釈に見舞われました。このため、宇美八幡宮では仏像を安全に保管することを目的に、氏子である新原の人たちに仏像を託したのです。古文書の宛先は「新原村御信心連中」と書かれています。新原村に迎えられなかったら、これらの仏像には、破壊されるかバラバ

大隅さんは福岡市に生まれ、香椎小・香椎中(現在は香椎第一中)・福岡高校を経て東京大学へ進学しました。福岡高校化学部時代のエピソードも盛んにテレビで取り上げられました。私たちの身近なところからノーベル賞受賞者が出たのですから、報道に接して驚くと同時に、ノーベル賞がぐっと近づいてきた感じもしたものです。

大隅さんの父が九州大学工学部教授だった芳雄氏(鉱山学)、兄が東京女子大学名誉教授の和雄氏(歴史学)で、兄が弟に贈った『ロウソクの科学』の話がテレビで繰り返し語られ、その後同書はベストセラーに入っているとも報じられています。私が驚いたのは芳雄氏の妻の父、つまり大隅良典さんの母方の祖父が長沼賢海だったことです。そして長沼賢海の名は、新原の石碑に刻まれています。このことはこの連載の第七回(平成九年九月)、第二三回(平成十一年二月)で取り上げたことがあります。この機会にあらためて紹介したいと思います。

新原のバス通りに面して建つ「新原保存仏像碑」(写真1)は敷

地の奥にある地藏堂の三体の仏像の由来を語るものです。石碑表面の上に右から左に「新原保存仏像碑」と書かれています(写真2)。これを題額と言います。その下に碑文が書かれ、その末尾に「九州大学名誉教授長沼賢海」とあります(写真3)。実際には「賢海」の部分は、文字は彫られているものの、墨が入っていないので見えにくくなっています。

裏面には、地藏堂の仏像が元々は宇美八幡宮の仏像であったことを示す古文書が写し取られています(写真4)。長沼教授はこの古文書が示す仏像の由来を将来に伝えるため、新原の人たちに頼まれて碑文を書いたのです(文章を作っただけでなく、

長沼賢海自筆の書です)。石碑の台座には、須恵村長今泉与七を筆頭に発起人・世話人・寄附者などの名がびっしりと書き込まれています(写真5)。これらはまだ調査されています。

仏像が宇美八幡宮から新原に移されたのが慶応四年(明治元年(一八六八))十月。仏像碑が建てられたのは昭和二十五年(一九五〇)十月です。当時は須恵町はまだ須恵村と言った時代でした(昭和二十八年町制施行)。

古文書の写しによると、宇美八幡宮の仏像、阿弥陀仏・薬師仏・弥勒仏と大師木像の四体がお堂と共に新原に移されました。文書に署名したのは留守美

らに売り払われる運命が待ち受けていたことでしょう。廃仏毀釈は貴重な文化財が海外に流出する原因にもなりました。

このように由緒ある新原の仏像ですが、専門家の調査によると、阿弥陀如来は平安時代中期(一〇世紀)、薬師如来は平安時代後期(一二世紀)の制作とされます。傷みがあったり、補修されたりはしていますが、古い時代の大切な文化財であることが明らかになっています。

仏像やお堂の保存、再評価に、長沼賢海が関わったことがあらためて思い起こされます。今となつては、「新原保存仏像碑」も文化財としての価値を増しています。

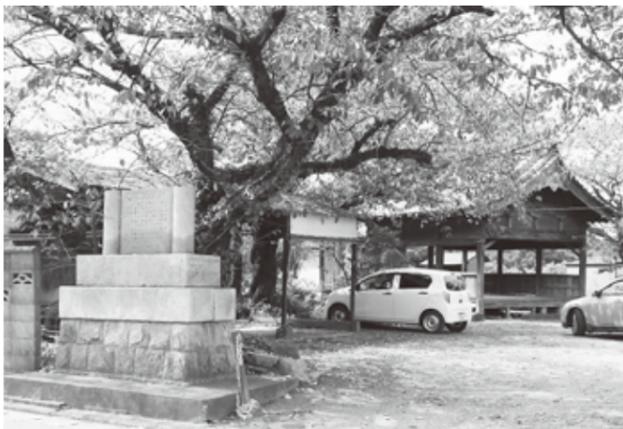


写真1 新原保存仏像碑と新原地蔵堂(敷地奥)



写真2 題額と碑文

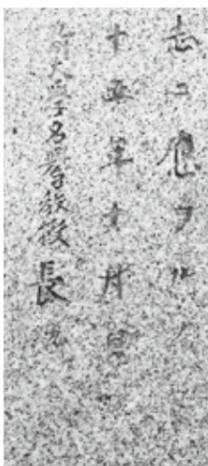


写真3 碑文末尾「長沼賢海」の名



写真4 背面「証文ノウツシ」の部分



写真5 村長・発起人・世話人・寄附者などの名